



書き初めの練習をする小学生ら12月上旬、浜松市浜北区の明書道教室

“デジタル世代” 子どもの習い事



そろばんに集中する子ども12月上旬、浜松市浜北区の内山珠算塾

読み書きそろばん 今こそ

パソコンやタブレット端末の普及などデジタル化が進む中、昔ながらの「読み書き・そろばん」が、県内の子どもたちの習い事に依然根強く選ばれている。保護者らが、子どもに従来の習い事を通して文化を感じさせたり、集中力を付けたりする機会にしたいとの思いがみられる。指導団体は子どもたちの興味を引くよう、低学年向けの大会を新設したり、漢字の成り立ちから教えたりなど工夫を凝らし

(浜北支局・松浦直希)

いる。

県珠算協会は2018年1月の県選手権大会に小学2年生以下の

プログラミングやダンスなど新

たな習い事が登場する中でも、書道とそろばんは健闘している。浜松学院大短期大学の今井昌彦教授(教育学)は「五感に訴える昔ながらの習い事には、生きる力を養う上で重要な役割がある」と指摘する。

リクルートマーケティングパートナーズの「ケイコとマナブ」子どもの習い事ランキングで習い

事に通う小学生以下の子を持つ母親927人に行った2017年調査では「今、習っている」部門で書道が4位、そろばん8位(1位水泳)、「今後、習わせたい」部門では書道3位、そろばん5位(同英語・英会話)だった。書道は両部門、そろばんは習わせたい部門でこの5年10位以内という。

県内外根強い人気

今井教授は「手を動かして集中することで創造性など学力では測れない非認知能力の向上に役立つ」と解説した。

五感刺激「生きる力養う」

いえる」とみる。

同区の明書道教室は約100人の生徒中6割が小学生以下。同教室は近年、字の成り立ちを学ぶため甲骨文字などの漢字を書く取り組みにも注力する。主宰の市川明美さん(56)は「漢字本来の意味を理解すれば、より書への興味が高まる」と狙いを話す。

浜松市浜北区の内山珠算塾に通う小学生55人中24人が1、2年生と低学年の割合が高まる。小学1年の長女が習う同区の主婦川合真由美さん(38)は「ネットですら、頭を使わなくなっているのではと不安になる。娘に自分で考える集中力を付けさせたい」と話す。

県書道連盟によると、同連盟会員の小学生の塾生から募る書き初め出品数は毎年3万1千点前後で数年間変化がないという。師岡素山西部支局長は「少子化を考えれば、出品数が減ってもおかしくない。書を習う子の割合は増えていると